

FLORA KANAGAWA

Mar. 10. 2005 No.59

神奈川県植物誌調査会ニュース第 59 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846
e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195



イワユキノシタ(2004年5月18日 西丹沢 森川美也子氏撮影). 丹沢新産.

木場英久：ついに野生化したイネ科植物	728
秋山幸也：相模原市内でカワラノギクが開花	729
勝山輝男：『神植誌 2001』の分布図の訂正	729
金子紀子：ヤマラッキョウの夏緑性について	730
貴島美鈴：大和市内でコンロンソウを確認	731
木場英久：カラスムギ属の新帰化植物	731
調査会からのお知らせ	
花暦調査参加者の皆さまへ	733
神奈川県レッドデータ生物調査のお礼と国のレッドデータ調査	733
会費の納入について	734
『神植誌 01』の正誤とホームページについて	734
2005 年度総会のお知らせ	734

ついに野生化したイネ科植物

(木場英久)

また松本雅人さんが新しい帰化植物を採集してこられました。エピソードを含めて紹介します。

2001年に、とある方が大山の山麓で栽培していた植物を採集して古川冷實さんのところに持ち込んだのが始まりです。古川さんから2001年8月11日に届いたメールによると、*Uniola latifolia* Michx.ではないかとのことでした。HitchcockのManual of the Grasses of the United Stateに全体図と小判のような形をした大きい小穂の拡大図が載っていました。ヒマラヤでカゼクサ属の一種*Eragrostis unioloides* (Retz.) Nees ex Steud.という種を見たことがあります。「*unioloides*」というのは「*Uniola* みたいな」という意味です。この種の小穂も小判形をしていました。本家である*Uniola*の図をまじまじと見たのはこのときが初めてでしたが、なるほどと思いました。

園芸植物には今ひとつ興味が持てずに、古川さんとそんなやりとりがあったことも忘れかけていた9月、また別の方から私のところへ、花屋で売っていたイネ科植物の名前を教えて欲しいと、押し葉が送られてきました。調べてみたところ、どうやら*U. latifolia*に行き着くようです。Hitchcockの図を見るまで、先月、古川さんが連絡してくれた植物であることがわかりませんでした。実物を見たのはこのときが初めてとはいえ、なんと血の巡りが悪いことでしょう。今思うと、植物誌を刊行した直後で脱力していたのかもしれない。

さらに1ヶ月後の10月、佐藤恭子さんから電子メールが来ました。どなたかが大山の山麓のトイレの横の植えマスの中にあった園芸植物らしいイネ科を採集されて、*U. latifolia*らしいという内容で、詳しい形態の詳細な記述と画像ファイルを送って来られました。もっと早く古川さんの情報を佐藤さんに伝えておけばよかったと思いました。きっと彼女も苦勞してこの種名にたどり着いたのでしょう。

ここまでの話は、神奈川県立生命の星・地球博物館の友の会の会報6巻1号で2002年に紹介したことがあります。3例とも栽培状態の採集品だったので、Flora Kanagawaには載せませんでした。そして、2004年の暮れ、勝山さんの机の横を通ると、一生懸命にこの植物を

同定しているではないですか。松本雅人さんがついに野生状態の個体を採集してきたのだそうです(2004.10.25 座間市小池栗原 KPM-NA0124115)。私の発見が遅れたので、勝山さんまで同定する羽目に陥りました。

つまり、『神奈川県植物誌2001』のイネ科を分担執筆した4人が、それぞれに別の人から受け取ったこの植物を、別々に同定してしまったわけです。この恨めしい経過を踏まえて、ヨドグサという和名を付けようかとも思ったのですが、それでは後の世の人に迷惑だろうと思い直し、他の名前を考えてみました。この植物は園芸植物の世界ではワイルドオーツとかシュッココンコバンソウ、ニセコバンソウ、グリーンスケール(緑の鱗)などという名で売られているようです。オーツは*Avena*のことだし、コバンソウ属ではないし、ニセコバンソウという帰化植物は別にあるし、コバンソウもグリーンスケールという名で売られることもあるようだし、園芸方面で使われている名前はどれもよくありません。最初にこの植物を同定した古川さんの発案でヘンペイソウという和名を新称します。薄っぺらい小穂をよく表現した名前だと思います。以下にヘンペイソウの形態を記述します(多くは佐藤さんの観察に基づいています…これでチョットは陽の目をみましたね)。

稈は太さ1~3mmで、硬い。葉身は長さ8cm、幅8mmで硬く、両面無毛。基部に長い毛が1~2本伸びているものもある。葉鞘は完筒形ではなく、基部まで分かれる。葉舌は低く、縁に微細な毛がある。小穂は長さ3cm、幅1.5cm



ヘンペイソウ

2001 10 16

で、12～13個の小花からなり、ときに暗紫色を帯び、極めて扁平。護穎は長さ12mm、3本の脈（1本は背の竜骨部）が目立ち、背が鋭い竜骨となり、小刺針があり、芒はない（痕跡のようなものはある）。内穎は長さ8mmで反り返り、竜骨に沿って緑色だが、縁は白色膜質で、2つに鋭く折れる。柱頭は濃茶色で長い。子房は長さ1.7mm。

北米東部原産で、ドライフラワーにも使われるそうです。現在では *Uniola* 属は細分されて扱われることが多く、この種の学名は *Chasmanthium latifolium* (Michx.) H.O.Yates となります。

相模原市内でカワラノギクが開花

(秋山幸也)

相模原市内の相模川左岸では1995年以降、カワラノギク *Aster kantoensis* Kitam. の標本記録が途絶えていた。以前は市内大島の神沢河原、同下溝の昭和橋付近、同磯部付近などに、いくつかの自然分布の個体群が知られていた。しかし、1980年代から急激に減少し、度重なる出水も追い打ちをかけて、磯部が1992年（川又猛氏、私信）、神沢河原が1995年（山口一郎氏、私信）を最後に市内では個体群が消滅してしまった。



カワラノギク

そんな中、2004年11月、神沢河原で1株が開花しているのを、相模原市環境対策課職員の内田英樹氏が発見した。連絡を受けて確認したところ、複々断面になった高水敷の下段、コセンダングサが優先する丸石河原に咲いていた。また、やや離れた場所には、残念ながら人によってもぎ取られたと思われるシュートが2本ころがっていた。開花株とは別株のものであるが、花数が多く、目立った場所に咲いてしまったために災難にあったのだろう。このシュートは乾燥による痛みが激しかったが、標本として相模原市立博物館に収めた。

相模川で神沢河原より上流のカワラノギクの生育地は、現在、右岸の城山町に1ヶ所あるのみで、ここは自然分布地をカワラノギクを守る会（河又猛会長）と地元小学校が保全しているところである。おそらく、今回の復活株は、種子がここから供給されたものと思われる。いずれにせよ、1株で復活と銘打つのは尚早であるが、移植をとまわずに自力で（？）左岸にたどりついたことを重視したい。相模川総合整備事務所等、関係機関と連絡を取りながら動向を見守るとともに、生育環境の保全に向けた取り組みを進めていきたい。

標本：相模原市大島 SA-1 5339-22-75 2004.11.9
秋山幸也 SCM17615

『神植誌2001』の分布図の訂正

(勝山輝男)

最近、いろいろな事情で『神植誌2001』の分布図を見直していて、いくつかの誤りに気付きました。

ミヤママタタビ

丹沢にあつて箱根にない植物のチェックをしていて、ミヤママタタビが松浦（1958、箱根植物目録）に記載されていないのに、『神奈川県植物誌1988』や『神奈川県植物誌2001』の分布図では箱根に分布点があるのに気づきました。さっそく標本をチェックしたところ、箱根の分布点はすべてサルナシと判明しました。実はこれらの標本は、すでにサルナシに同定が変更されていましたが、コンピュータのデータベースには反映されず、分布図にはミヤママタタビとし

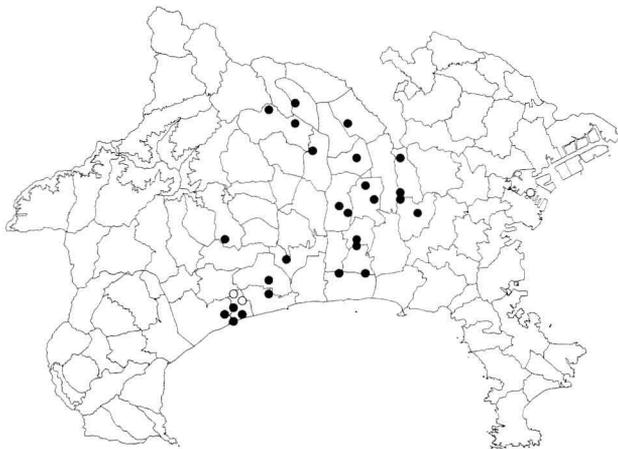
て打ち出されてしまっていたものでした。箱根のほか、藤野や相模湖方面の分布点も城山町のものを除いてサルナシのものでした。結局、ミヤマタタビの分布は神奈川県では丹沢の比較的標高の高いところに限られるようです。

ミナトアカザ

ミナトアカザの分布図 (p.655) を見ると、川崎区の埋立地に6個の分布点(●)がありますが、これらはすべてシロザでした。牛糞由来の帰化植物は、畜産農家の多い県の中央に特徴的に出現します。ミナトアカザはかつては輸入飼料が入る埠頭でも稀に採集されていましたが、最近の埠頭は管理が行き届き、帰化植物の生えるような空き地は少なくなっています。「川崎区の埋立地に分布点がいくつもあるのは不自然だな」と思い、標本を再チェックしたところ、川崎区のも



ミヤマタタビの分布図



ミナトアカザの分布図

のはすべて誤りと判明しました。ミナトアカザは誤同定の多い植物なので、必ず標本をチェックしていたのですが、標本のデータをぎりぎりまで分布図に反映させようとして、データベースを修正しないまま分布図が出力されてしまったようです。

ヤマラッキョウの夏緑性について

(金子紀子)

多くの図鑑ではラッキョウは冬にも葉がある点をヤマラッキョウとの識別点としているが、ヤマラッキョウの葉が冬にも残ることがあるのを見つけたので紹介する。

金沢区で採集したヤマラッキョウの標本を提出(YCB416344)したが、その後冬にも緑の葉が残っているのに気づき、不安になり、林辰雄先生に再確認をお願いした。花柄の長さ、花数その他全ての特徴はヤマラッキョウに間違いないということであった。

ヤマラッキョウは横浜市内では多くないが、1997年の春、私たちのグループが野生植物の保護活動を行っているヤマラッキョウの自生地にハイキング道が新設されることになり、横浜市緑政局の依頼により工事区域内のヤマラッキョウを工事区域外に移植した。その後人目につくようになり、盗掘されてヤマラッキョウの数が激減したために増殖を依頼され、3株を持ち帰り、毎年種子から育てたものを自生地に戻す活動を続けている。

手元で育ててみて、ヤマラッキョウも毎年冬の間も緑の葉が3/4程度は緑色のまま元気に残っている事に気づいた。確認したところ、自生地の里山でも毎年冬に葉が残っていた。友人に観察を依頼した結果、横浜市栄区や伊豆半島では冬にも葉があることが分かったが、群馬県中之条町では12月上旬から葉が枯れ始め、12月下旬には全ての葉が茶色く枯れた。

冬期のヤマラッキョウの葉の有無は冬期の気温によるもので寒地と暖地では違ってくる事が確認できた。また、花数や花柄の長さも生育条件によって異な

り、ヤマラッキョウでも1本の花茎に12個程度のもの、花柄が2cmあるものなどさまざまであった。

確認のためラッキョウ畑でラッキョウを観察した結果、ラッキョウの葉の色は白青色を帯びており、生時には一目でヤマラッキョウと区別できること、ラッキョウの葉は断面が半円形で中空、ヤマラッキョウの葉は扁平で中実であることが分かった。

大和市内でコンロンソウを確認

(貴島美鈴)

現在、大和市内の大規模緑地である泉の森で、植物相調査を実施している。これは、泉の森を受託している(財)大和しみどりのまちづくり振興財団が管理運営のために行なっているものである。

2004年4月17日、湿地周辺調査を実施中に調査班国澤氏がコンロンソウを確認した。一昨年度は、開花状態が確認できず、葉柄基部の状態からヒロハコンロンソウではなく、コンロンソウではないかと推定していた。今年度は、開花したものを確認し、コンロンソウと正式に断定した。『神植誌2001』によると神奈川県下でも稀な種であることから、花の着いたものを標本にし、相模原市立博物館に提出した。

コンロンソウは、湿地周辺の土壌が湿潤な半日陰の崖地部分に生育していた。今年度は20株ほどが自生していることが確認された。

(標本：大和市長の森 2004.4.17 泉の森植物調査班 SCM17655)

カラスムギ属の新帰化植物

(木場英久)

松本雅人さんが採集されたカラスムギ属の帰化植物を紹介します。

神奈川県にはカラスムギ *Avena fatua* L. のほか、4種の帰化植物(マカラスムギ *A. sativa* L., オニカラスムギ *A. ludoviciana* Durieu, ミナトカラスムギ *A. barbata* Pott ex Link, セイヨウチャヒキ *A. strigosa* Schreb.) が知られていました(佐藤2001, 木場2003b)。日本全体に範囲を広げると、北海道にハダカエンバク *A. nuda* L. の記録があります(伊藤ほか1990)。ハダカエンバクの苞穎と護穎は質感がよく似ていますが、その他の5種では、苞穎が膜質で半透明なのに、護

穎は硬くて不透明で、質感がずいぶん違います(Rocha 1980)。松本さんが採集された植物(図A, B)は、護穎の質感が苞穎とそれほど違わなかったため、ハダカエンバクではないかと思っていました。第1小花にだけ芒があったのも、ハダカエンバクと一致していました。

平凡社の『日本の帰化植物』のカラスムギ属(木場2003a)を書いたときには、ハダカエンバクは東大や科博などのおもな標本庫でも国内産の標本を見ることができなかつたのと、地方植物誌や同好会誌などにも見られず、北海道にどのくらい定着しているのかもわからなかつたので、紙面の都合もあり、検索表にも入れず、属の末尾で軽く触れるのに留めてしまいました。しかし、その後に出た『北海道の外来種リストー北海道のブルーリスト2004ー』(<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-kskky/alien/bluelist/bluelist2004.pdf>)などをみると、ハダカエンバクは、北海道には定着しているようです。松本さんの標本を見たときには、「北海道に帰化していた植物が、神奈川でも採集された」程度のことだと思っていました。

それからしばらくして、機会があつてスミソニア自然史博物館の標本庫(US)に行くことができました。さすがに約430万点の標本を収蔵する(ちなみに県博はコケ、菌含めて約20万点)だけあつて、種数も各種の点数も多いと思われました。*A. nuda*の標本(図C)も見ることができたのですが、松本さんの採集品と印象が違いました。写真を撮らせてもらつて、帰国してから比較すると、松本さんのは小花をつなぐ小軸が長く、護穎の先端もとがらず、芒が出る位置も先端に寄つていて、*A. chinensis* (Fisch. ex Roem. & Schult.) Metzg. という種に相当することがわかりました(Tzvelev 1976)。この種は、内蒙古などで穎果を麵の材料にしたり、全草を飼料にするために栽培される植物だそうです。中国方面の植物誌でも *A. nuda* に誤同定されたことがある植物です(Wang 1994)。松本さんによると、この植物を採集した辺りは、他にも中国東北部からの帰化植物が出現しているところだそうです。それとも合致します(松本2004)。仮にチュウゴクカラスムギという和名で呼びますが、どうにかして北海道に帰化している植物の標本を手に入れて、

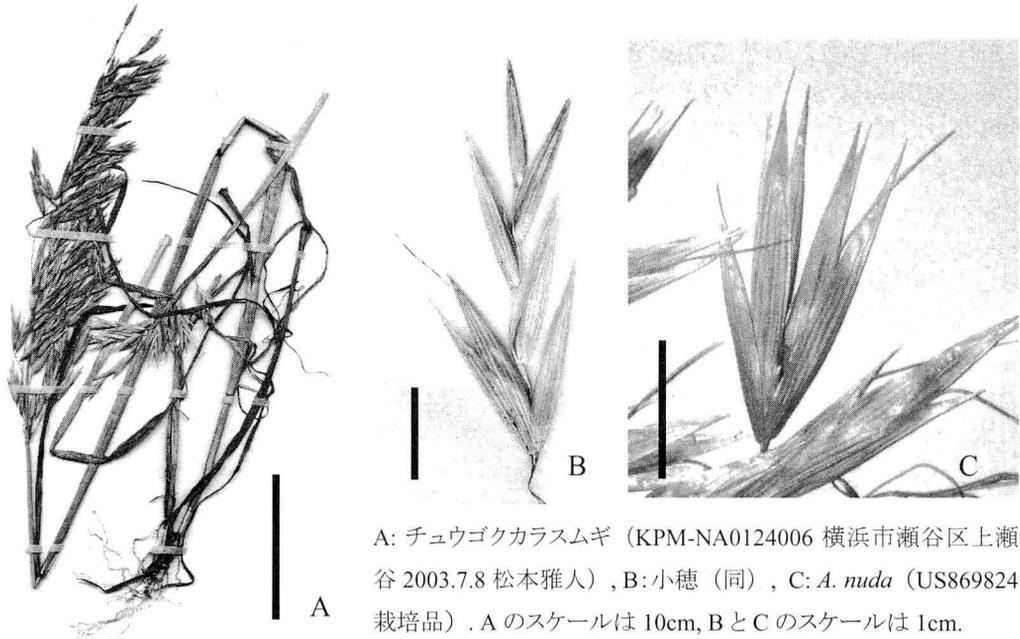
それが本当の *A. muda* であるかどうかを検討したいと思います。

最後に『神奈川県植物誌 2001』には載っていない3種を含めた検索表を掲載します。

参考文献

伊藤浩司・日野間彰・中井秀樹, 1990. 環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録 II. p.34. たくぎん総合研究所.
 木場英久 a, 2003. カラスムギ属, 清水建美編, 日本の帰化植物. pp. 257-258. 平凡社, 東京.
 木場英久 b, 2003. セイヨウチャヒキ. FLORA KANAGAWA, (55): 690.
 松本雅人, 2004. 上瀬谷の帰化植物. FLORA KANAGAWA, (57): 713-714.

佐藤恭子, 2001. カラスムギ属. 神奈川県植物誌調査会編, 神奈川県植物誌 2001. pp. 282-284. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
 Tzvelev, N.N., 1976. *Avena*. in Zlaki SSSR (Grasses of the Soviet Union). pp.236-243. Nauka Publishers, Leningrad.
 Rocha Afonso, M.L., 1980. *Avena*. in Tutin, T.G. et al. ed., Flora Europaea. vol. 5, pp. 206-208. Cambridge Univ. Press.
 Wang, C., 1994. *Avena*. in Ma, Y. ed., Flora Intramongolica (内蒙古植物志), second ed., vol. 5, pp. 168-169. Typis Intramongolicae Popularis, Huhhot.



A: チュウゴクカラスムギ (KPM-NA0124006 横浜市瀬谷区上瀬谷 2003.7.8 松本雅人), B: 小穂 (同), C: *A. muda* (US869824 栽培品). A のスケールは 10cm, B と C のスケールは 1cm.

検索表

- A. 苞穎と護穎の質感は似ていて, 護穎の脈は全体で見える
 - B. 護穎は鈍頭. 芒は護穎の先端近くから出る. 小穂は長さ 23 ~ 35mm..... チュウゴクカラスムギ
 - B. 護穎は鋭頭. 芒は護穎の先端 1/3 の辺りから出る. 小穂は長さ 18 ~ 25mm..... (ハダカエンバク)
- A. 苞穎は膜質, 護穎は革質で, 護穎の脈は先端付近のみで明瞭に見える
 - B. 護穎の先は深く2裂し, 芒状になる
 - C. 護穎は有毛. 熟すと小花が脱落する..... ミナトカラスムギ
 - C. 護穎は無毛. 熟しても小花が脱落しない..... セイヨウチャヒキ
- B. 護穎の先は浅く2裂するが, 芒状にはならない
 - C. 小穂は長さ4cmで, 芒は2..... オニカラスムギ
 - C. 小穂は長さ3cm以下で, 芒は0~3
 - D. 1小穂に芒は2 (~3), 途中でよじれて屈折する. 小花の基盤は有毛..... カラスムギ
 - D. 1小穂に芒は0か1, よじれず直立する. 小花の基盤は無毛..... マカラスムギ

調査会からのお知らせ

花暦調査参加者の皆さまへ

● 2005年2月で、2年間の調査が終了します。毎月1回の調査、ご苦労様でした。記録されたデータについては、既にお渡ししてある報告用紙1・2の書式に従って、3月20日までに提出をお願いいたします。また、山地などに出かけた際の記録をお持ちの方は、報告用紙3の書式でご提供ください。

郵送の場合 〒254-0041

平塚市浅間町12-41 平塚市博物館 浜口宛
メールの場合 hamaguti@green.ocn.ne.jp

● さて、2年間の調査を終えましたが、データの整理には相当の時間がかかりそうです。できれば、半年ほどで結果をまとめる努力をしたいと思いますが、今後の調査については、その整理を踏まえた上で、何らかのテーマで、もう少し突っ込んだ調査を計画したいと思います。2005年は「全体の調査はなし」ということでご理解ください。

● 今後の調査のひとつの選択肢として、次のテーマに「シダ植物の生物季節」を取り上げるという案があります。そのためには、葉の展開や胞子の成熟についての記録方法を検討し、マニュアルを作る必要があります。そうした調査に興味のある方がおられましたら、上記の浜口までご一報ください。シダの専門家の方々のご指導を受ける機会などにお誘いしたいと思います。

(文責：浜口哲一)

神奈川県レッドデータ生物調査のお礼と国のレッドデータ調査

神奈川県レッドデータ生物調査の調査票の記入ありがとうございました。本来は調査票が事務局に届いたときに礼状を送すべきなのですが、この場を借りてお礼申し上げます。調査票は現在コンピュータのデータベースに登録中で、2005年夏までには再評価の作業を行ないたいと考えています。追加情報などがありましたら、事務局までお願いします。

また、神奈川県レッドデータ生物調査と平行して、環境省のレッドリストの見直し調査があ

りました。環境省のレッドリストの維管束植物は、1/25,000地形図を1メッシュとし、その中の個体数と減少率を調査し、それを集めてコンピュータで絶滅確率を計算してランクを決めます。全対象種を個体数まで再調査するのは予算的にも時間的に難しいので、2003～2004年の2年間で、EN種(絶滅危惧ⅠB類)とVU種(絶滅危惧Ⅱ類)については、机上で前回データの見直し、CR種(絶滅危惧ⅠA類)と追加調査種(前回の調査で未検討の分類群で調査が必要なもの)は現状の個体数を調査をするというものです。

EN、VU種については『植誌01』の標本データベースをもとに、前回のデータを修正し、2003年の冬に提出しました。CR種と追加種については、神奈川県の対象種はそれほど多くはありません。神奈川県ではすでに「絶滅」とされているものを除くと、CR種はヤシャイノデ、ミズキンバイ、ムラサキツリガネツツジ、ヤマタバコ、ユキヨモギ、サガミジョウロウホトギス、キソエビネ、クゲヌマラン、ムカゴサイシンの9種です。これらは現地を見に行ったり、標本を採集された方にお聞きして、データを作成しました。ムカゴサイシンを除いて現存が確認できました。ムカゴサイシンは環境が変化し、消滅してしまったようです。また、ヤシャイノデはニホンジカの採食による被害があり、個体数が著しく減少し、もとは大きな株であったものが小さくなって、かろうじて生き残っているという状況でした。

追加調査種で神奈川県にあるものは、オニイノデ、ヒメタデ、ミドリアカザ、アズマツメクサ、ヤブザクラ、ヒロハノカワラサイコ、フナバラソウ、ツルカコソウ、ゴマノハグサ、バアソブ、ハマサワヒヨドリ、オナモミ、トウゴクヘラオモダカ、ミズオオバコ、コウガイモ、ハタバカンガレイ、ヒメノヤガラ、シロテンマ、ギボウシラン、マツランです。これらも現地調査と聞き取り調査を行い、今回の神奈川県レッドデータ生物調査の調査票で不足分を補い、12月末に提出しました。オニイノデは神奈川県では産地が多く、個体数まで調べるのは難しいと思いました。ヤブザクラも同定が難しく、満足のいくデータを得ることはできませんでし

た。また、ヒメタデ、ミドリアカザ、アズマツメクサ、フナバラソウ、ツルカコソウ、ゴマノハグサ、パアソブ、シロテンマ、ギボウシランは再確認できませんでした。アズマツメクサは箱根のお玉ヶ池に確実にあると思われるのですが、ここ2年間は発生時期に水位が高く、見つけることはできませんでした。ヒメタデやゴマノハグサのように攪乱されたところに稀に現われるものも短期の調査では出会うのが困難です。シロテンマも発生したときに、その場所に行かなければならず、西丹沢の奥地まで行く余裕はありませんでした。

以上の環境省のレッドデータ対象種は県のレッドデータ生物調査の対象種でもあります。新産地や再発見の情報がありましたらお知らせください。

(文責：勝山輝男・木場英久・田中徳久)

会費の納入について

神奈川県植物誌調査会の会費は年額2,000円です。毎年、問い合わせや間違った金額での入金があります。事務局でも振替用紙を年度の入れ替わり時期には同封するようにしていますが、ご協力と確認をお願いします。

振替口座：郵便振替 00230-5-10195

加入者名：神奈川県植物誌調査会

なお、1年間会費を滞納しますと、退会扱いとなりますのでご注意ください。会費の納入状況のお問い合わせは、事務局の田中徳久 (e-mail: tanaka@nh.kanagawa-museum.jp) までお願いします。

(文責：木場英久・田中徳久)

『神植誌 01』の正誤とホームページについて

2002年2月に『神奈川県植物誌 2001』の正誤表を出しましたが、その後も誤りが判明しています。誤りが見つかる、正誤記録用の本に赤ペンで書き込みを入れ、付箋をつけておくのですが、ざっと見て60件くらいがたまって来ました。多くは学名のスペルや命名者の省略形のミスで、本号で紹介した分布図のミス (pp.729-730) のような大きなものは少ないのですが、そろそろ次の正誤表を作成する必要があるかもしれません。

とは言え、正誤表を印刷するとなるとやはりお金と時間がかかります。そこで、ここ数年、総

会でも事業計画に組み込まれているホームページを仮に運用することに致しました (URL: <http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>)。あくまでも「仮」ですので、蓄積された正誤がすべて掲載されているわけでもなく、更新の頻度も低いのですが、アクセス可能な方はちょっと寄って下さい。事務局もその方面は素人ですので、どこまでご期待に沿えるか疑問ですが、何かご意見がありましたら、遠慮なくご一報ください。

(文責：勝山輝男・田中徳久)

2005年度総会のお知らせ

例年4月に開催している総会ですが、今年度は少し遅めの5月8日(日)13:30~16:00、神奈川県立生命の星・地球博物館講義室で開催します。万障お繰り合わせの上、ご参集ください。

編集後記

今号のプロラカナガワは、2月に出る予定でした。浜口さんから1月4日に来た e-mail で、「今後の発行予定はどのようになっていますでしょうか。2月で花暦調査が区切りになるので、何らかのメッセージを出さねばと思っているのですが、2月に出なければハガキ連絡にしようかと思えますので、およその予定をお知らせ下さい。」とのこと、勝山さん、田中さんと話し合っ、頑張っ、て2月中に出すことに決め、回答しましたが、正月ぼけが吹っ飛ぶ思いでした。

私は運良くもらえた研究費で2月6日から24日まで北米の標本庫巡りに出るため、ヘンペイソウの原稿をほぼ仕上げ、あとの編集作業は田中さんに押し付けて、出かけてしまいました。旅の途中で気にかかるは調査会のことばかり(ウソです)。もしかしたら私がいないうちに田中さんが仕上げ印刷しておいてくれるのではないかと淡い(甘い)期待をいだきつつ帰国してみると、「きつと木場さんが何か書きたいだろうから空けておいたよ」と空白の1ページ半。原稿が足りなくて、発行できるわけがありません。時差ぼけを吹っ飛ばして原稿を書きました。おかげで仕入れたての情報を載せることができ私は嬉しかったのですが、浜口さんとの約束は守れませんでした。

(文責：木場英久)